

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

研究報告・東京外大・AA 研共同利用・共同研究課題・2018-2020 年度・第一回研究会
「南アジアにおけるムスリム社会の民族誌的研究」

本年度の第一回研究会は、ムスリム社会の民族誌的研究に焦点を置き、特に AA 研の故原忠彦教授（1934-1990）のムスリム社会の民族誌を取り上げて、学際的な観点からその意義を検証する研究会を、シンポジウム形式で開催した。参加者は約 120 名であり、多面的な観点からの活発な意見交換が行われた。その概要は、以下の通り。

2018 年度第 1 回研究会（通算第 1 回目）

シンポジウム「50 年後に振り返るベンガルの農村社会－故原忠彦教授の民族誌再訪」

日時：2018 年 6 月 24 日（日）14:50-17:30

場所：東京外国語大学 研究講義棟 115 号

共催：日本ベンガル・フォーラム，基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究－人類学におけるミクローマクロ系の連関 2」，共同利用・共同研究課題「南アジアにおけるムスリム社会の民族誌的研究」

谷口晋吉（一橋大学名誉教授）

開会の挨拶

外川昌彦（AA 研所員）

「ベンガル農村社会の民族誌的研究－故原忠彦教授のムスリム社会研究から見た」

杉江あい（AA 研共同研究員，東京外国語大学／日本学術振興会）

「現代バングラデシュ村落社会の多面性－故原忠彦教授の民族誌と後続の村落研究より」

藤田幸一（京都大学）

「バングラデシュ農業・農村開発の社会的基盤－故原忠彦教授の議論に寄せて－」

高田峰夫（AA 研共同研究員，広島修道大学）

「原忠彦先生の研究を最初のバングラデシュ調査から考える－生涯にわたる調査と業績との関連を念頭に置きつつ－」

石井溥（AA 研元所長，東京外大名誉教授）：ディスカッサント

全体討論

シンポジウム趣旨文：

日本のバングラデシュ研究の草分け的存在として知られ、文化人類学者としても多様な研究領域に成果を残した故原忠彦教授（1934-1990）は、1962-4 年に行ったチッタゴン県ゴヒ

ラ村での農村調査の成果をムスリム社会の民族誌 (*Paribar and Kinship in a Moslem Rural Village in East Pakistan*) にまとめ、1967 年にオーストラリア国立大学の博士論文として提出されました。

約 5 千万人の人口であった当時の東パキスタンは、現在では 1 億 6 千万人の人口を擁するバングラデシュとなり、その間にベンガルの地域社会は多様な変化を経験し、南アジアの地域研究をめぐる環境も様々な変化を遂げています。

本シンポジウムでは、今年で 50 周年を迎える故原忠彦教授によるベンガル農村社会の民族誌的研究を振り返り、地域社会の視点を通して見られるベンガル社会の多様な変化や、多岐にわたる原忠彦先生の問題関心の広がりやを跡付けることで、原先生が残した豊かな研究領域の成果を振り返り、その今日的な意味を議論します。